

# ヴィクトリア朝期の小説における反帝国主義の流行と そのプロパガンダ的特長の研究

深町悟

## 論文の要旨

ジョージ・チェスニー (George Chesney) が 1871 年に発表した「ドーキングの戦い」(“The Battle of Dorking”) によって未来の戦争を描いてプロパガンダを発信するという手法が確立され、また、それは多用された。

本論文では、「ドーキングの戦い」を起源とする「侵攻文学」などと呼ばれる作品群の優れたプロパガンダ的手法がどのように受け継がれ発展していったのかを、1871 年から 1882 年までの期間に焦点を当てて当時の作品群を個別に論じる。また、それらの作品には反帝国主義的な特徴が多々見られるが、それについても分析することで、一部の作家たちの間で流行していた「侵攻文学」の手法には反帝国主義の流行をも内包していたということを明らかにしたい。本論文は 3 部構成で、年代に分けて作品を論じる。

第一部は、「侵攻文学」の基礎となる「ドーキングの戦い」についてである。この作品では英国の決定的な敗戦が大げさな予測で描かれている。その予測とは英国が間違いを犯し続ける一方、敵国は冷静に英国を侵攻するというものである。作者の主張を唱える手段として優れていた点、つまり作者のプロパガンダ的特長は、1870 年の普仏戦争の結果、英国にもドイツが攻めてくるかもしれないという当時流行していた英国のアラーミズムを上手く利用した点だろう。さらには、すでに存在する読者の恐怖をさらに増長させ、読者自身に自分たちがその恐怖を回避する行為者であるという認識を与えた上で、彼らの意識を彼が期待する解決策へと導くことでもある。読者の理性ではなく感覚に訴えかけるのである。この作品の手法は読者の恐怖と共感を巧みに喚起しようとするということに尽きる。

「ドーキングの戦い」は軍事プロパガンダの類と見ることができるが、それ以外にも反帝国主義的要素を持った作品であるとも言える。英国が世界中に広大な領土を持っていなかったら、限られた英国の予算と人員を本土の防衛に集中することができ英国は不利な戦いを強いられずに済んだのだ。そのような作者の考えは、英国軍が世界中に散らばったことを背景に語られる、「我々は信じられないほどの愚かさで、守ることのできない領土を保有し続けていたのだった」(“with incredible folly, we continued to retain possessions which we could not possibly defend”), という言葉に見ることができるのである。

第二部は「ドーキングの戦い」以降 1870 年代の「侵攻文学」作品についてである。1870 年から 1871 年に起きた英国のアラーミズムが落ち着いた後、1870 年代の英国には民衆が感じる目立った侵攻の危機は起きていない。この当時の「侵攻文学」は数が少なく、トルコを中心とする東方問題に絡めて作品作りをする傾向があった。

『50 年が過ぎ』(Fifty Years Hence, 1877) は東方問題を題材にし、特に、1876 年にトルコで起きたとされるクリスチャンの虐殺報道を受けて書かれた作品であろう。この作品の主張はトルコは悪しき国であり、英国はその国との友好関係を解消すべきだ、というものである。その主張をするための手法

は老兵が孫に語りながら物語を進めることや時間設定など「ドーキングの戦い」に酷似している。しかし、この作品では子供に向かって世界情勢や英国の取るべきだった外交姿勢といった難しい話をしている。それは、孫たちを気遣えないほどに悲観に暮れたナレーターの老人の窮状を表す手法であるとも考えられる。基本的には「ドーキングの戦い」と同じ手法を使っているが、戦場が読者に馴染みの薄いトルコであるため読者の危機感を募らせる役割は持たせにくいだろう。

『トルコの分割』(*The Carving of Turkey*, 1874) もやはり東方問題に関連した作品である。そして『50年が過ぎ』と同じく英国の外交姿勢についての主張がなされており、英国軍の改革といった論点は持たない。その中で世界大戦とも呼べるほどの大きな戦争が4年間という長期に渡って行われるという第一次世界大戦に近い予測をしていることは斬新である。そして、その予測を読者に説得する方法は英国の成功談を繰り返し述べて、成功のモデルケースを宣伝することである。

『1883年の侵攻』(*The Invasion of 1883*, 1876) における英国への侵攻の前提は、オスマン帝国を得ようとするロシアとオーストリアに対抗するため、英国はエジプトへ多くの陸海軍を送るというものである。「ドーキングの戦い」のプロットを踏襲していると考えられるのは、まず、時間設定が現実の作品出版から数年後というものだ。そして、敵国がドイツであるということと、ボランティア隊が防衛力として重要な役割を担わされていること。さらに、海外の権益を守るために多くの軍勢力が割かれ英国本土の守備が手薄になっていたというところだろう。この作品のプロパガンダ的主張は主にボランティア隊を改革すべきというものである。それを効果的にするために、まず、1876年に出版されたこの作品は、1870年の普仏戦争が与えたドイツの脅威という比較的新しい英国の読者の記憶を利用した敵国の設定をしている。

『海峡トンネル、すなわち英国の破滅』(*The Channel Tunnel; Or England's Ruin*) は 1876 年に発表された作品であるが、東方問題とは関係のない物語である。英仏海峡の海底トンネル建設を題材にしている。しかし、敵国の設定はフランスではなくドイツである。1870年の普仏戦争と1882年の「海峡トンネル危機」の中間の時期にあって、その両方の危機を利用した作品だと言える。この作品について特に語るべき手法というのは、物語の中で歓迎されていた多くのドイツ人観光客が侵攻軍の兵士となって英国を攻めるといったものである。そして、兵士だけでなく英国にいる一般の外国人にも警戒心を抱かせようとする手法を明確に使用したのは「侵攻文学」としてはこの作品が初めてであろう。

次に、これらの作品に見られる反帝国主義の思想をまとめる。『1883年の侵攻』では、海外の権益や領土を英国が保有していたことから、それが仇となり、敵軍に攻め込まれてしまう隙を作ってしまう。『50年が過ぎ』では、貪欲に世界中の領土を得ようとする英国の姿勢をロシアの拡張政策に準えて非難し、また、トルコへの投資が失敗しないように軍勢力を使って利益を守ろうとする英国が破滅してしまう。『トルコの分割』については、崩壊しかかっていたトルコを分割統治することについて「組織化された強奪機構」(“an organized system of pillage”) とまで非難され、列強のパワーゲームに関与しない姿勢を保持した英国が繁栄していく。『海峡トンネル、すなわち英国の破滅』

においては、ドイツがフランスから得た戦争賠償金の一部をロシアに渡し、ロシアが中国を攻めることを「征服株式会社、無限責任」(“A joint-stock of conquering system — unlimited”)、と皮肉を込めて語られる。「征服株式会社」という、その征服する事業の出資者はどこかの被征服国で、事業継続のために彼らが負うのは無限の責任、つまり、帝国主義は限りのない搾取であるという考え方がこの作品に表われている。このように、これらの作品でも帝国主義に否定的な思想が見えているのである。

第3部は、1882年の「海峡トンネル危機」に関連して出版された「侵攻文学」作品についてである。『いかにジョン・ブルはロンドンを失ったか』(*How John Bull Lost London*, 1882)では「ドーキングの戦い」とは違って、長く頁を割いて、いかにフランスが敵意をもった隣人であるかを読者に説明している。英国が侵攻される過程では『海峡トンネル、すなわち英国の破滅』のように、フランス人旅行客が戦闘員に変わるというプロットを採用している。作者は、トンネル建設と、それによって陸路で結ばれるフランスへの嫌悪感を読者に喚起させることに集中していると言える。

「海峡トンネルの話」(“The Story of the Channel Tunnel”, 1882)は海峡トンネルを使った英国へのフランスからの侵攻を水際で防ぐことができたという成功談を語り、その成功談と対比させて、トンネル建設賛成派の中心的人物であったエドワード・ワトキンを攻撃する手法でトンネル建設に反対している。そして、ワトキンを中心とする賛成派がいかに金銭に貪欲で自己中心的な集団であるかを語り、彼らが惨めに破滅していく様子に海峡トンネルの失敗を重ねているのである。

『ブローニュの戦い、いかにカレーが再び英国領となったか』(*The Battle of Boulogne: Or, How Calais became English again*, 1882)では、フランスの視点で英国への侵攻を描いている。英国国民の愛国心を多分に喚起する語りで、英国軍を隣国への信頼心が厚かったために騙された正義の軍としている一方、侵攻を企てた側のフランス軍を勝つためならばどんな卑怯な手でも使う悪しき軍としている。つまり、善と悪の対決を分かりやすい構図で描いているのである。

この時代の海峡トンネル建設に関係する「侵攻文学」作品は、英国とフランスとの二国間の関係が重要視され、英国と世界の関わりという視野は非常に限定的である。それが端的に表れているのは『ブローニュの戦い』である。この作品はフランスの領土を得て、今以上に英国が繁栄するというプロットであることから、むしろ帝国主義的作品であると言える。しかし、同じように英仏間での争いを描く「海峡トンネルの話」は違って、一部の資本家が英国の将来を考えず自己中心的に利益を求めた結果、それが英国の不利益になるという物語で、当時の帝国主義的事業を非難したものであるだろう。『いかにジョン・ブルはロンドンを失ったか』では、トンネル以外からもフランス軍が侵攻してくる。それは、英国の海軍力が世界中に散らばっていたことが原因となってフランス艦隊を防げなかったからである。また、中国に影響力を持ちたいという英国の見栄を見透かしていたフランスが、英国の艦隊を中国に誘導して、より英国の防衛力を弱めることに成功するという場面もあり、英国の帝国主義が英国の弱点として扱われているのである。

このように見ていくと、英国が外国軍に侵攻されるという「侵攻文学」の

手法の流行は反帝国主義的作風の流行とも考えられるのである。